

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第173集

川向遺跡発掘調査報告書

国道107号世田米バイパス関連遺跡発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

川向遺跡発掘調査報告書

国道107号世田米バイパス関連遺跡発掘調査

序

本県は遺跡の宝庫といわれるほど、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。一方、地域開発促進の中でも道路網の整備は広大な面積を有する本県の重要施策となっており、これらの開発行為と、先人の貴重な文化財を保護し保存していくことの均衡を保つことは私達に課せられた責務であると思えます。

保護保存と開発という相反する目的を有する事業の調和のとれた行政施策が今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、県教委文化課の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する処置をとってまいりました。

本報告書は、県南部にある住田町内を通る国道 107 号世田米バイパスに関連し、平成 2 年度発掘調査した川向遺跡の結果について収録したものであります。調査の結果、縄文時代晩期を中心とする遺物が発見され、気仙川流域における遺跡の集落変遷や文化の推移を知る上で貴重な資料を得ることができました。

この報告書が斯学の研究のみならず広く活用され、埋蔵文化財に対する理解が深められるように願ってやみません。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご援助・ご協力を賜りました岩手県土木部大船渡土木事務所、住田町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成 3 年 12 月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 工藤 巖

例 言

1. 本報告書は、岩手県気仙郡住田町世田米川向6-7ほかに所在する川向遺跡の調査結果を取録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、国道107号世田米バイパス建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と岩手県土木部大船渡土木事務所の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
3. 岩手県遺跡登録台帳番号と遺跡略号は、次のとおりである。
遺跡番号…NF 15-1389 調査略号…KM-90
4. 調査期間と調査担当者は、次のとおりである。
平成2年4月12日～5月24日、高橋義介・神 敏明
5. 調査面積は、1,200㎡である。
6. 室内整理期間と整理担当者（執筆者）は次のとおりである。
平成3年2月1日～3月31日、高橋義介
7. 石質鑑定は、佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）に依頼した。
8. 本報告書では国土地理院発行の50,000分の1地形図、岩手県土木部作成の500の1用地図を使用した。
9. 土層の色調観察には農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」を使用した。
10. 発掘調査および室内整理に際しては、次の方々からご教示とご協力をいただいた。
紺野知文・菅野 浩氏（住田町教育委員会）、千田明雄氏（吉田工務店）、遠藤勝博氏（広田水産高等学校）、佐々木清文・佐藤嘉広氏（岩手県立博物館）
11. 野外調査にあたっては、住田町上有住地区の方々にご協力をいただいた。
12. 調査にかかわる諸記録および遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

<目 次>

序
例言

<本 文>

I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の立地と環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 地形と地質	2
3. 基本層序	3
4. 周辺の遺跡	3
III. 調査経過と調査方法	5
1. 調査の経過	5
2. 調査の方法と室内整理の方法	5
IV. 調査の結果	6
1. 石器	6
2. 石製品	7
3. 土偶	13
4. 土製品	13
5. 土器	14
V. まとめ	16

<図 版>

第1図 遺跡の位置図	1	第16図 土器(5)	21
第2図 地形分類図	2	第17図 土器拓影(1)	22
第3図 基本土層	3	第18図 土器拓影(2)	23
第4図 周辺の遺跡	4	<写真図版>	
第5図 調査区域図	5	写真図版1 調査区遠景・近景	24
第6図 石器(1)	8	写真図版2 調査前近景	25
第7図 石器(2)	9	写真図版3 土層断面	26
第8図 石器(3)	10	写真図版4 調査区完掘	27
第9図 石器(4)	11	写真図版5 石器(1)	28
第10図 石器(5)	12	写真図版6 石器(2)	29
第11図 土偶・土製品・石製品	13	写真図版7 石器(3)	30
第12図 土器(1)	17	写真図版8 石器(4)・土器(1)	31
第13図 土器(2)	18	写真図版9 土器(2)	32
第14図 土器(3)	19	写真図版10 土器(3)	33
第15図 土器(4)	20	写真図版11 土器(4)	34

I. 調査に至る経過

一般国道 107 号は大船渡市を起点に北上市・横手市などを經由し、本荘市に至る総延長 197 km の路線であり、太平洋沿岸から日本海沿岸を結ぶ横断幹線道路である。

世田米バイパスは住田町世田米付近の赤畑～大崎間約 2 km の道路交通問題の解消等を目的に計画された。事業の着手にあたり、岩手県教育委員会が昭和 63 年度に遺跡の分布調査を行っており、平成元年 5 月 8 日～10 日の試掘調査で縄文時代晩期の遺物包含層を確認している。

川向遺跡の調査については、平成元年 9 月 5 日付け教文 415 号で事業照会し、同 9 月 29 日付けで回答を受けた後、岩手県教育委員会と岩手県土木部大船渡土木事務所で協議を行い、発掘調査を岩手県文化振興事業団の平成 2 年度受託事業として調整実施することとした。

これを受けて当埋蔵文化財センターは、平成 2 年 4 月 1 日付け委託契約により発掘調査を実施することとなった。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

川向遺跡は、住田町役場の北西約 800 m に位置している。国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図【盛】の図幅に含まれ、北緯 39 度 8 分 34 秒、東経 141 度 34 分 9 秒付近にあたる。遺跡の所在する住田町は、県南東部の気仙郡の内陸部にあり、東側が大船渡市・釜石市、西側が江刺市・大東町、南側が陸前高田市、北側が遠野市の 5 市 1 町と隣接し、総面積は、335.95 km²である。



第 1 図 遺跡の位置図

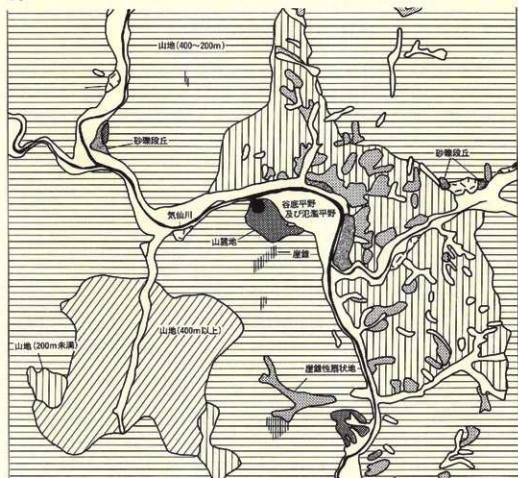
1 : 50,000 縮

2. 地形と地質

岩手県の地形概観は、西側が秋田県との境界を南北に福島県・栃木県境まで総延長 500 km におよぶ奥羽脊梁山脈が走り、中央部は北上河谷帯を南北に縦断する全長 243 km の北上川が南流している。東側は青森県八戸市付近から県内の東半分を経て、宮城県牡鹿半島に及ぶ南北 250 km、東西 80 km の細長く紡錘形に伸びた高原状の北上山地が広がっている。

住田町は北上山地の南東部側に位置している。川向遺跡は気仙川右岸の山麓から伸びた緩斜面の縁辺部に立地しており、周囲は標高 500~800 m 未満の山地が連なっている。遺跡の東側は谷底平野が広がり、気仙川左岸には小規模な砂礫段丘の発達が見られる。遺跡での標高は 82~83 m 前後で、気仙川との比高は 4 m ほどである。

当地域は中生代の花崗岩類、古生代の固結堆積物の輝緑凝灰岩・泥岩・石灰岩等を基盤層としている。気仙川の左岸は花崗岩類、遺跡のある右岸は石灰岩と輝緑凝灰岩類で占められている。



第2図 地形分類図

1 : 50,000 縮

3. 基本層序

調査区域内は第5図に示すように旧用水路を境に水田と牧草地に利用している。牧草地は近年大規模な造成によって改変されたものである。そのため厚さ数10cmにおよぶ盛土整地が行われている事から、地点によって上層部に多少の差異が見られる。本遺跡の基本層序は次の7層に大別される。

I層 暗褐色(10 YR3/4)シルト 耕作土で径1cm大の円礫を少量含み、層厚は10~25cmである。

II層 暗褐色~いよ黄褐色(10YR3/3~4/3)

シルト質土 盛土層で径1~8cm大の円礫や角礫と黄褐色粘土のブロックを多く含んでいる。層厚は牧草地側で20~最大50cmと深くなっている。

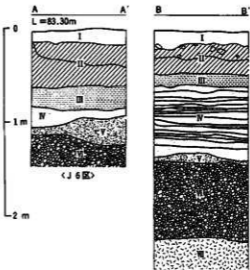
III層 いよ黄褐色(10 YR4/3)砂質シルト 旧田の鋪床層にあたる部分で、下位には水酸化鉄斑の堆積がみられる。削平を受けており、層厚は5~15cmである。

IV層 明褐色~黄褐色(7.5 YR5/6~10YR5/6)砂質シルト~粘土質土 黄褐色土、明褐色土、褐色土の互層で、下位には粘土質のいよ黄褐色土の堆積が見られる。全体に堅くしまっており、層厚は10~最大75cmである。

V層 黒褐色(10 YR3/2~2/2)シルト質土 遺物の包含層で、径1cm大の円礫を少し含んでいる。層厚は10~30cmで、調査区の南側が厚く北に行くにしたがって薄くなるようである。旧用水路の北側区域は既に層が削平されている。

VI層 暗褐色~いよ黄褐色(10 YR3/3~10YR4/3)砂礫層 径10~40cm大の円礫を多く堆積している。層厚は90~150cmほどで、調査区の北側に行くほど層位が厚くなる様相を示している。

VII層 いよ黄褐色(10 YR4/3)砂質シルト 全般に粘性にとみ堅くしまっている。層厚は最大で30cm前後である。



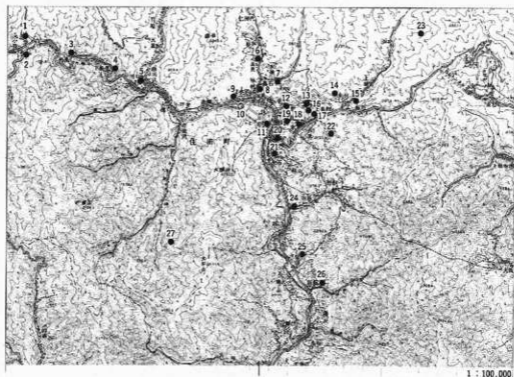
第3図 基本土層図

4. 周辺の遺跡

住田町内における遺跡の数は、平成3年4月現在で99ヶ所ほど確認されており、広田湾に注ぐ気仙川支流の中沢川・大股川・坂本川沿いに分布している。昭和39年(1964)に蛇王洞遺跡

の調査が芹沢長介によって行われ、縄文時代早期中葉～末葉の土器、石器、獣骨、貝類等が出土している。昭和46年(1971)の住田町教育委員会による湧滑水洞穴遺跡の調査では、縄文時代早期末葉の土器・後期の人骨27体、室町時代の人骨2体、貝輪、骨針等が出土している。町内の調査事例が少なく実態は明らかではないが、縄文時代の後期から晩期にかけての遺跡が6割以上を占めており、洞穴遺跡が5ヶ所、中世城館が10ヶ所を数える。全体に奈良・平安時代の遺跡は少ないようである。うち13遺跡は宅地造成や土地改良工事等により既に消滅している。

第4図は周辺の遺跡を全国遺跡地図「岩手県」より27遺跡を抜粋したものである。



No	遺跡名	内容・時代	No	遺跡名	内容・時代
1	小椋遺跡	散布地・縄文(中・後期)土器	15	城内遺跡	散布地・縄文(中期)土器、石器
2	鯉遺跡	散布地	16	上根新遺跡	散布地・縄文(中・後期)土器
3	上野里遺跡	散布地・清瀬	17	上日向遺跡	散布地・縄文(後・晩期)土器
4	下田里遺跡	散布地・縄文土器	18	下日向遺跡	散布地・縄文(後期)土器
5	川口遺跡	散布地・縄文土器	19	小枝遺跡	散布地・縄文土器
6	浄福寺遺跡	散布地・縄文(後期)土器	20	大崎遺跡	散布地・縄文土器
7	針山遺跡	散布地・縄文(後・晩期)土器	21	鹿田米城跡	城跡、本丸、板倉台
8	万蔵寺遺跡	散布地・縄文土器	22	杉山遺跡	散布地・縄文(後期)土器
9	赤瀬遺跡	散布地・縄文(中・後期)土器	23	湧滑水洞穴	洞穴・縄文時代(早期)土器・(後期)人骨
10	川向遺跡	散布地・縄文(晩期)土器	24	山谷遺跡	散布地・縄文土器、石器
11	元澤寺跡	寺院跡	25	佐新遺跡	散布地・縄文(後期)土器
12	小口刺遺跡	散布地・縄文(後・晩期)土器	26	田塚遺跡	散布地・縄文土器
13	中沢上根遺跡	散布地・縄文(後・晩期)土器	27	鬼丸洞穴	洞穴・縄文(後期)土器
14	東平遺跡	散布地・縄文(晩期)土器			

第4図 周辺の遺跡

Ⅲ. 調査経過と調査方法

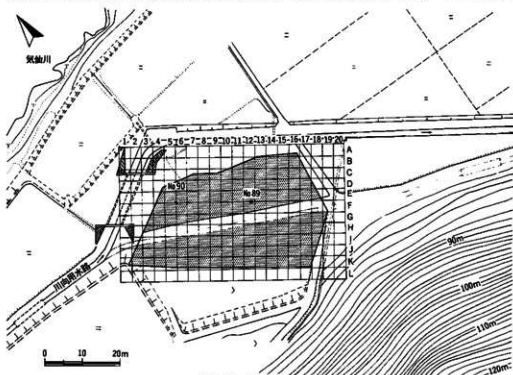
1. 調査の経過

平成2年4月12日(木)発掘器材を搬入して調査事務所の設営を行う。4月13日(金)調査区内の雑物除去作業と並行して刈り払い作業を行い、午後から遺跡の調査前の写真撮影を開始する。4月14日(土)土層の堆積状態や遺構検出面までの深さを把握するため、遺跡の数ヶ所に幅2mのトレンチを設定して試掘を延べ6日間行う。試掘の結果、表土の除去は重機(エンボ)を使用することとし、4月24日(火)から5月7日(月)までに延べ5日間稼働した。

粗掘と並行し5月7日(月)から遺構検出作業を開始する。5月9日(水)基本層序の断面実測を行う。5月21日(月)県教育委員会文化課の調査終了確認を受けた後、一部埋め戻し作業を行う。5月24日(木)発掘器材の搬出を行い現地を撤収する。

2. 調査の方法と整理の方法

(1)調査区画の設定 道路中心杭のNo89とNo90を基準点とし、2点間を見通す直線と基準点を通りこれに直交する直線を座標の基軸線とした。なお、基軸線は真北に対し約51度30分東偏している。基準点No90を原点とする3m×3mの区画を設定し、アルファベットと数字の



第5図 調査区域図

組み合わせでA1区・B1区等と呼称した。配列については第5図の調査区域図のとおりである。

(2)粗掘 雑物の除去と刈り払い作業から開始し、試掘トレンチ、粗掘、遺構検出の順に進めた。表土層が厚い区域の粗掘は重機(ユンボ)を使用して行った。

(3)実測・写真撮影 実測は簡易遺り方測量を設定して行ったが、一部平板測量も用いた。実測図は縮尺20分の1を基本としている。写真撮影は6×7cm判1台(モノクロ)と35mm判2台(モノクロ・リバーサル)を使用し行った。

(4)室内整理 現場に残った遺物の注記から開始し、遺物ごとの仕分け、接合復元、土器の石育入れ、遺物の実測、拓本、遺構・遺物のトレース、遺物の写真撮影、図版・写真図版作成の順に作業を進めた。また、これらの作業と並行して遺物の計測、諸鑑定、原稿の執筆を行い報告書に掲載した。

(5)図面 遺物図面の縮尺は、石器・土製品類2分の1、土器3分の1・4分の1を原則としているが、器種の大きさに応じては一部縮尺を変えてある。

IV. 調査の結果

今回の調査で遺構は検出されなかったが、縄文時代の遺物を多く出土している。遺物は調査区域のほぼ全域から出土し、総量は大コンテナ25箱ほどである。土器は縄文時代の中期後半・後期・晩期に至るもので、晩期のものが大部分を占めている。他に刻片石器、礫石器、石製品、土偶、土製品等も僅かに出土している。石器から順に説明をする。

1. 石器

(1)石鎌 (第6図1~8、写真図版5)

石鎌は8点出土している。1は基部に深い抉入のある無茎鎌で、やや細身のものである。2~7は基部が突出する有茎鎌である。3・4は菱形を呈し、6・7の先端部は欠損している。8は柳葉形の基部が尖る尖基鎌である。石質は1・3・5・8がチャート質粘板岩、2・4・6・7がチャート質凝灰岩である。

(2)石錐 (第6図9~12、写真図版5)

大小合わせて4点出土している。9はつまみ部と錐部を両端から丁寧に調整剥離を施したもので、錐部の一部は欠損する。10~12は調整加工された細身棒状のもので、断面は菱形を呈している。石質は9・10がチャート質凝灰岩、11・12がチャートである。

(3)石匙 (第6図13、写真図版5)

13はつまみ状の小突起をもった縦型石匙である。刃部は両縁にあり、一方は両側から他は片側から丁寧に調整加工を施している。石質はチャートである。

(4) 撥・削器 (第6・7図14~18、写真図版5・6)

撥器や削器に類するものを本稿では一括し撥・削器としている。16・17は一側縁に直刃状の刃部を有するもので、16は片側、17は両側から刃部の剝離調整を施している。14・15は曲線状の刃部を有するもので、半円状の側縁に刃部をつくり出している。15は片側、14・18は両側から丁寧に調整加工を施している。石質はチャート質粘板岩である。

(5) 不定形石器 (第7図19~22、写真図版6)

剥片を利用して縁辺部に調整剝離を加え刃部をつくり出しているが、適当な名称を与えることができないものを一括した。20~22は自然面を残す剥片を利用したもので、石質はいずれもチャート質粘板岩である。

(6) 磨製石斧 (第7図23~25、写真図版6)

3点出土しているがいずれも刃部は欠損している。24は小形のもので基端部に敲打痕があり、両面と側面は丁寧に研磨加工されている。23はやや細身のもので、基端部は円形を呈している。側縁は荒く研磨して後をつくり出している。25の基端部は平坦で面を施してある。石質は23が硬砂岩、24が粘板岩、25が凝灰岩である。

(7) 敲石 (第8図、写真図版7)

28は拳で握れる大きさで、断面は楕円形状を呈している。両端部と側縁に強い敲打痕があり、端部の一方は欠損している。石質は粘板岩である。

(8) 石棒 (第8図29~32、写真図版7)

29~32は両端部を欠損した石棒の破片である。29はやや細身のもので、断面は楕円形状を呈し、表面の研磨は丁寧に施されている。30は円柱状を呈し、表面の研磨は粗雑である。石質はいずれも粘板岩である。

(9) 石皿 (第9・10図33・36、写真図版7)

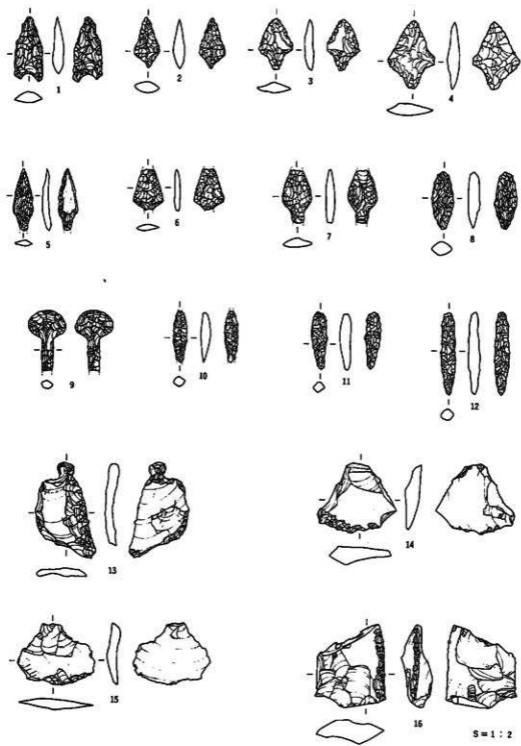
33・36の2点が出土している。いずれも半欠品で扁平な転石を利用したものである。33は片面に浅く縁取りが施され、36は自然の凹み部も使用している。石質は砂岩である。

(10) 磨石 (第9・10図34・35・37・38、写真図版7・8)

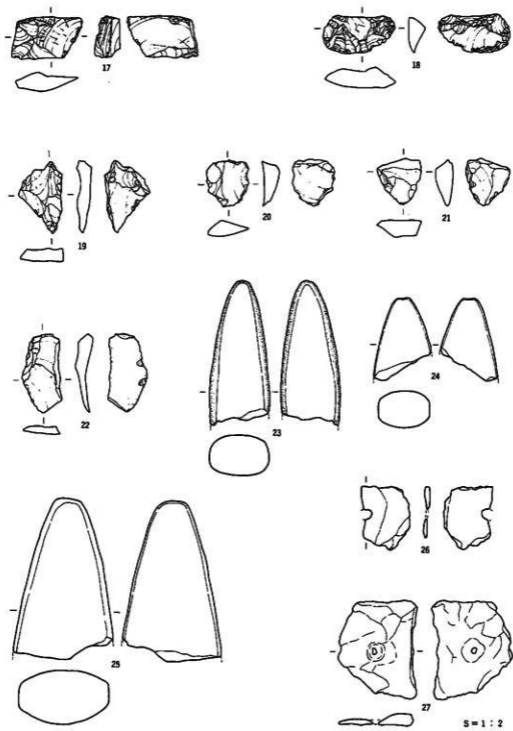
磨面や擦痕があるものを一括した。34・35・37が棒状、38は円形状を呈している。34が4面、他は2面が良く使用され磨滅している。石質は37が硬砂岩で、他は粘板岩である。

2. 石製品 (第7・11図26・27・43、写真図版6)

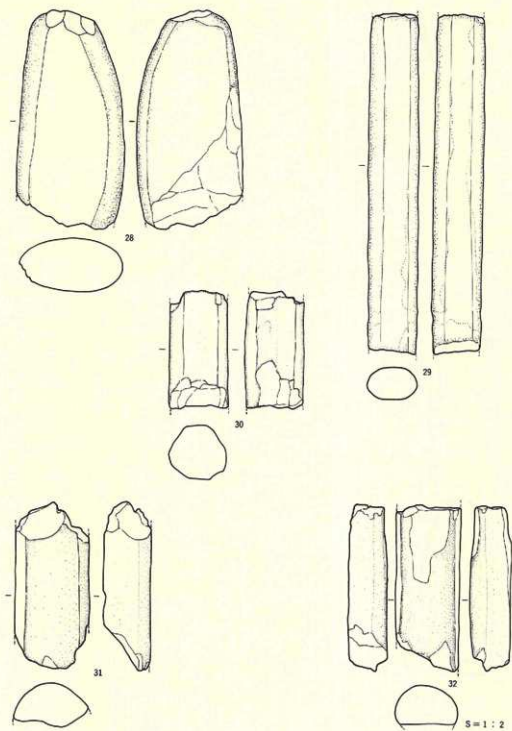
26・27は有孔石製品である。26は周縁部を打ち欠いて整形し、27は片側から穿孔を施している。43は周縁部を丁寧に調整を施した円盤状石製品である。石質は26・27が粘板岩、43が泥岩である。



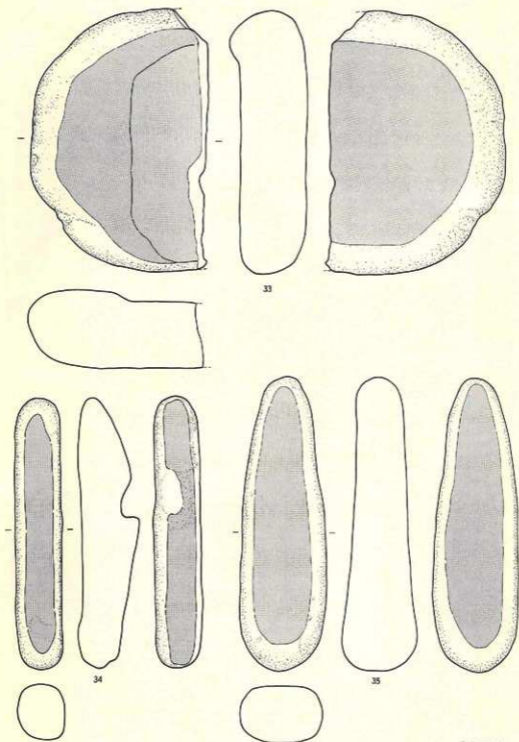
第6图 石器(1)



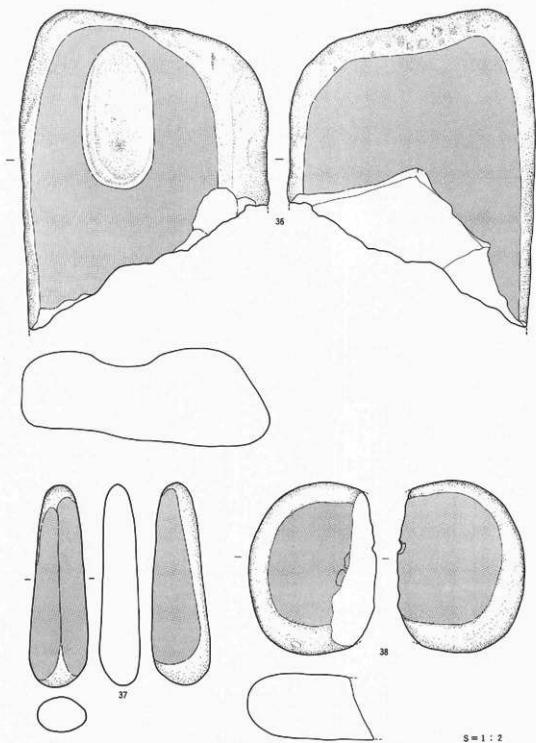
第7图 石器(2)



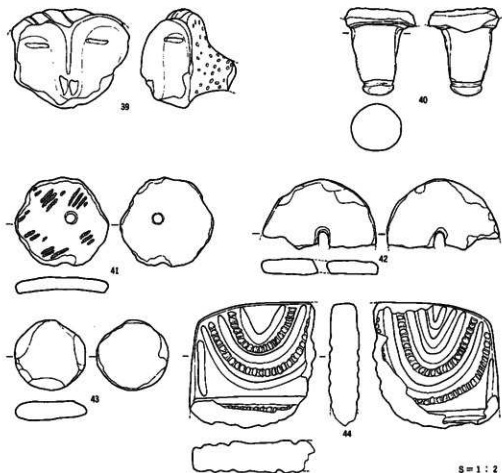
第8圖 石器(3)



第9圖 石器(4)



第10圖 石器(5)



第11図 土偶・土製品・石製品

3. 土偶 (第11図39・40、写真図版8)

頭部と脚部の破片が出土している。39は一部欠損しているがハート状の顔面を呈し、鼻は山形状の隆帯で表現し、目は細長い刺突が施されている。頸部は長く全面に刺突があり、頭部は髪を結った姿を示している。40は円柱状を呈した脚部の破片で、やや湾曲し下端に浅い1条の沈線が走り、胴体部の境には刺突が施されている。

4. 土製品 (第11図41・42・44、写真図版8)

41・42は縄文土器破片を円盤状に打ち欠いたもので、土製円盤・メンコ等と呼ばれている。円形を基調とし、中央付近に径6~9mm大の穿孔が両側から施されている。周縁部の整形は41が打ち欠き、42は全周を丁寧に磨ってある。

44 は欠損しているが土版と思われるものである。両面は沈線と刺突で文様を描いており、厚さは1cm前後で黒色を呈している。

5. 土器

土器は縄文土器で占められ、総量が多いものの完形品はなくすべて破片である。図面を掲載したのは拓本を含め66点である。大きく時代ごとに第Ⅰ～Ⅲ群に大別し、文様や施文の特徴により細分した。

第Ⅰ群土器（第17図72～74）

本群は縄文時代中期末葉に属する土器である。深鉢の口縁部破片で、いずれも波状を呈している。縦位の八字の沈線文や横位の沈線文が描かれ、72・73 は中に縄文が充填され、74 は刺突が施されている。

第Ⅱ群土器（第13・17図53・75～81、写真図版9）

本群は縄文時代後期に属する土器である。53 は深鉢で、口縁部は頸部から外傾気味に立ち上がり、縦長の刺突された隆帯を貼り付け、3条の沈線を施している。75・76 は同一と思われる深鉢の口縁部破片である。75 はへら状の突起部で、沈線にそって刺突が施されている。76 は波状口縁で、並行する沈線の下端に円形刺突が施されている。77 は沈線文の間に円形刺突が施されている。78 は小波状を呈する深鉢の口縁部破片で、沈線文と並行して交互に刺突が縦位と横位方向に施され、沈線による入組文様が描かれている。

79・80 は貼瘤、81 は網目状文を施した深鉢の破片である。

第Ⅲ群土器（第14～18図、写真図版8～11）

本群は縄文時代晩期に属する土器を一括したもので、次の6類に細分した。

1類 羊歯状文を主体とする一群で、82～90 が該当をする。器種は鉢・浅鉢が主体を占めており、図化しなかったが注口土器の破片も出土している。

2類 雲形文と磨消縄文を主体とする一群で、45・91～93 が該当をする。45 は小型の鉢で、短小の口縁部は外傾し口唇部に刻み目、胴部には沈線文と刺突が施されている。器種は91 が皿で、92・93 は鉢ないし浅鉢である。

3類 平行する沈線文を主体とする一群で、54～62・64・65・94～99 が該当をする。器種は鉢・浅鉢・深鉢・壺等がある。54～56・94・95 は鉢で、口縁部は54・55 が平縁、56・94・95 が波状か山形口縁を呈し、頸部からくの字状に屈曲して立ち上がっている。54～56 は口唇部に刻み目を施し、94・95 は浅い沈線が巡っている。沈線文は頸部下端に2～5条平行に施されている。

95 は頸部の沈線文の間に刺突が施されている。

57・96 は壺である。57 は胴部上半が強く張り出す器形で、口縁部は頸部から直に立ち上がり、上端部でくの字状に外反をする。2条の沈線が廻り、口唇部は刻み目を施している。96 は胴部破片で、平行沈線文が描かれている。

58・59 は大型の浅鉢である。口縁部は山形状を呈し口唇部に1条、58 は内側に2条の沈線が廻っている。頸部下半には沈線文と平行して刺突文が施されている。60 は浅鉢で、湾曲する口縁部に2条の沈線と口唇部に刻み目を施し、胴部には羽状縄文が施文されている。

61・62・64・65・97～99 は深鉢である。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がるものと外反する62があり、4～5条の平行沈線文と口唇部に刻み目を施している。口縁部の内側に沈線が廻るのは61・62・64・65・98・99である。

4類 工字文を主体とする一群で、51・52 が該当する。51 は小型台付鉢の脚部破片である。52 は小型壺で、口縁部は頸部からくの字状に屈曲し、口唇部に1条の沈線が廻っている。胴部は強く張り出し、頸部から胴部下半にかけて工字文様が施されている。底部には4個の小突起があり脚となっている。

5類 変形工字文を主体とする一群で、101～108 が該当する。器種は鉢・浅鉢・壺がある。101～104 は平縁、106・107 は波状口縁を呈する浅鉢で、101・106 の文様の合わせめには2個1対の粘土粒が貼り付けられている。波状口縁の口唇部には1条の沈線が廻っている。

105・108 は壺の口縁部破片である。105 は平行する沈線文に粘土粒が貼り付けられている。108 の口縁部は頸部から直に立ち上がり、上半部に浮文による工字文様が描かれ、口唇部に1条の沈線が廻っている。

6類 上記の群に属するものであるが、時期不明なものを一括した。46～48・50 は小型の鉢で、49 は小型の浅鉢である。口縁部は46・47 が波状、他は平縁を呈し、48 の口唇部には刻み目を施している。49・50 は無文で横位にヘラミガキされている。

63・66～71 は深鉢である。63 は胴部上半が張り出し、口縁部は頸部から直に立ち上がり、口唇部に刻み目を施している。66 の口縁部は無文で頸部から直に立ち上がり、胴部には原体末端の結節回転圧痕が見られる。67 は湾曲する口縁部で、口唇部は平坦である。

68～71 の底部は無文であるが、図化しなかった中には網代直を呈するものもある。109～110 は深鉢の破片で、補修孔と思われる径4～7mm大の穿孔が施されている。

V. まとめ

本遺跡から遺構は検出されなかったが、縄文時代の遺物が出土している。遺物総量は多く、その大部分が縄文土器破片で占められている。出土の状況は、調査区中央部付近の埋没した沢筋に沿って散布する様相を示している。遺物が出土する層位は、主に基本土層の（V層）の黒褐色土中からである。この遺物包含層は気仙川によって過去数度となく冠水をうけ、近年の耕地整理による改田で削平・盛土造成が行われ攪乱されている。この様なことから遺物の層位学的な時代判別は不明であった。

出土した土器は縄文時代中期末葉、後期前葉・末葉、晩期前葉～末葉に属するもので、晩期の土器が主体をなしている。次のⅢ群に大別をした。

第Ⅰ群土器 本群は∩字・C字状の沈線文と磨消帯をもつもので、縄文時代中期末葉の大木10式に属するものである。

第Ⅱ群土器 本群は文様や施文方法の特徴から縄文時代後期に属するものを一括した。沈線文や剣突を主体とするものと貼瘤文があり、前者は前葉に、後者は末葉の東北北半の十腰内V式に含まれる。

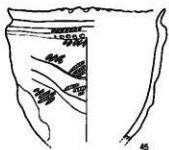
第Ⅲ群土器 本群は文様の特徴から縄文時代晩期に属するものを一括し、6類に細分した。1類は半歯状文を主体とする前葉（大船渡市大洞貝塚出土の土器を標式とする）の大洞BC式である。2類は鬚形文と磨消縄文の一群で、中葉の大洞C₁式である。3類は平行する沈線文を主体とする中葉の大洞C₂式である。4類は工字文を特徴とする後葉の大洞A式である。5類は変形工字文を主体とする末葉の大洞A'式である。6類は上記の5群のいずれかに属しているが、時期不明なものである。

土器は大洞BC式・C₁式・C₂式の縄文時代晩期前葉から中葉を中心とするものであり、全体に浅鉢や深鉢の出土が多い傾向がみられる。

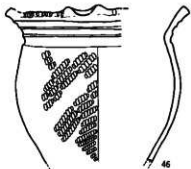
土器の器種組成は完形品が少なく不明な点が多いものの、鉢・浅鉢・深鉢・台付鉢・壺・注口土器・皿・香炉形土器等であり、鉢・浅鉢には小型と大型の器形もみられる。

土器以外の遺物としては、石鏃・石錐・石匙・搔器・削器・不定形石器の削片石器類、磨製石斧・石棒の石核石器類、敲石・石皿・磨石の礫石器類、有孔・円盤状石製品類、土偶、円盤状土製品・土版が僅かに出土している。土偶は縄文時代後期・晩期に属するものである。

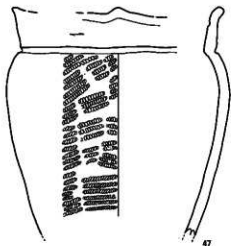
遺物の出土状況と地形面から見て、川向遺跡の中心部は埋没した沢が延びる西側山麓寄りの緩斜面上に広がると思われる。今後気仙川流域での調査事例が増して研究が進むことにより、当地域の縄文時代晩期中葉から末葉における集落変遷が明らかになることを期待したい。



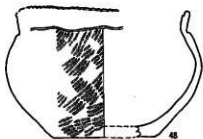
45



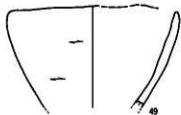
46



47



48



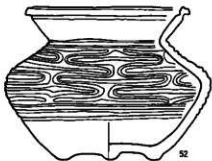
49



50



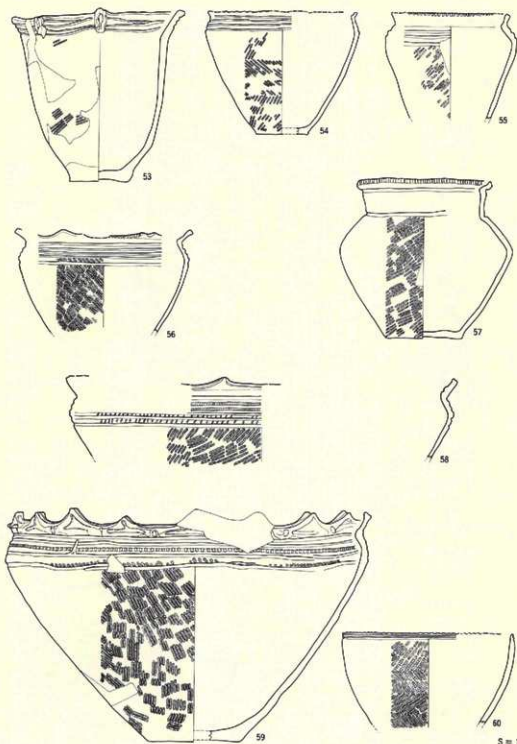
51



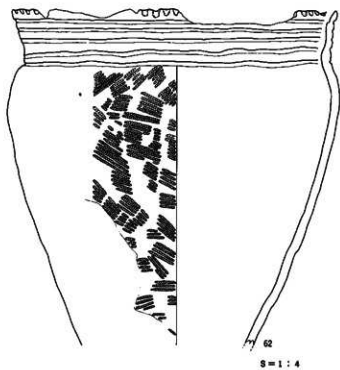
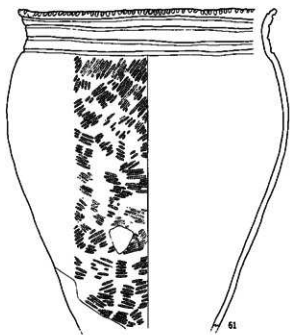
52

第12图 土器(1)

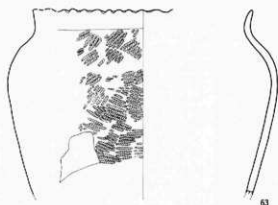
5 = 1 : 2



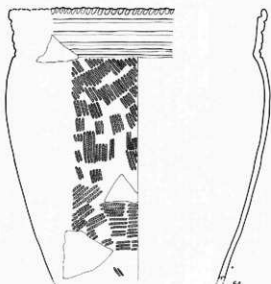
第13圖 土器(2)



第14圖 土器(3)



63



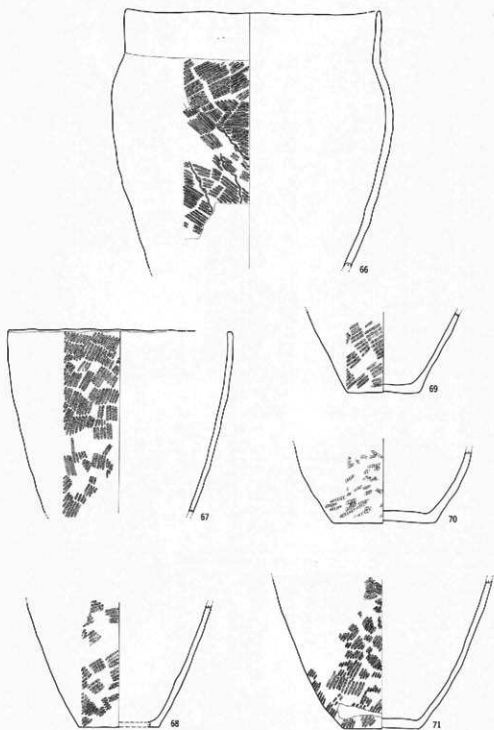
64



65

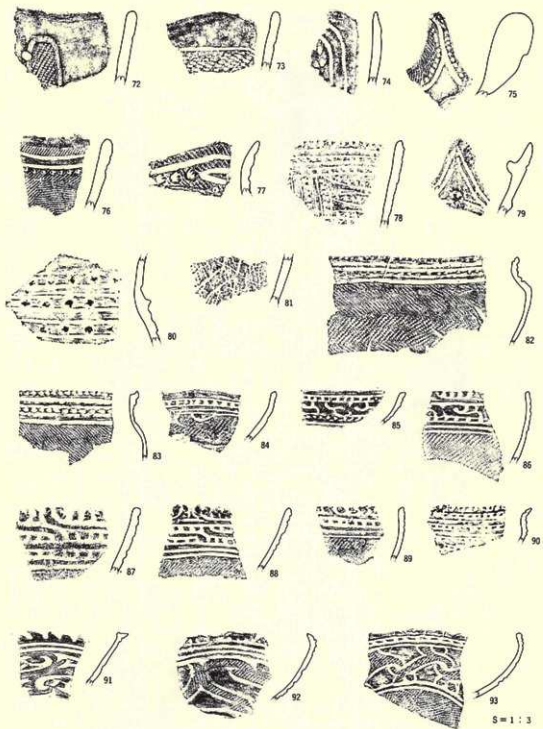
S = 1 : 4

第15図 土器(4)

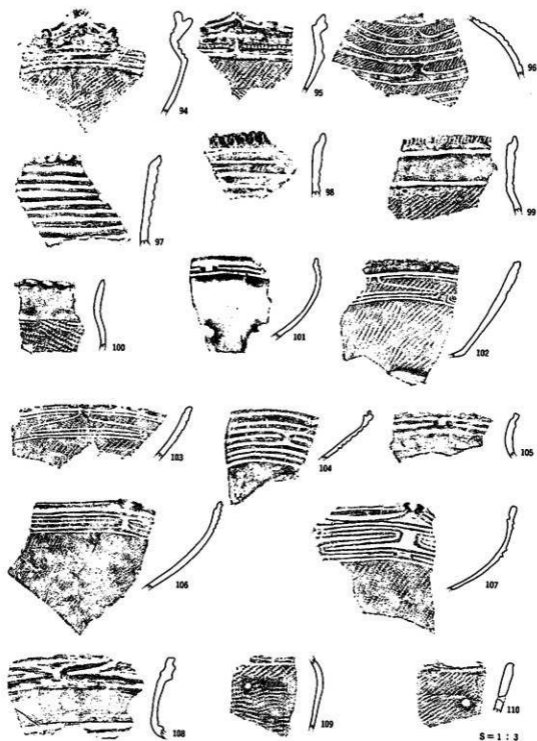


第16図 土器(5)

S=1:4



第17图 土器拓影(1)



第18图 土器拓影(2)



調査区遠景（東側から）



調査区近景（北側から）

写真図版 1 調査区遠景・近景

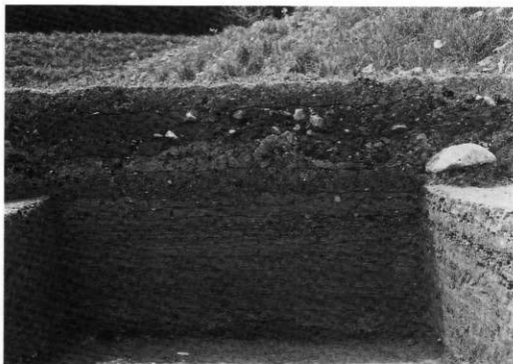


(北西側から)

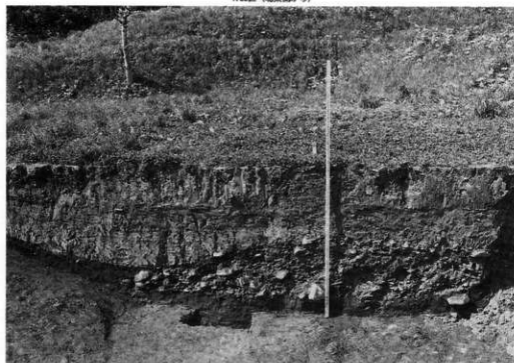


(南東側から)

写真図版 2 調査前景



K03区 (北東側から)

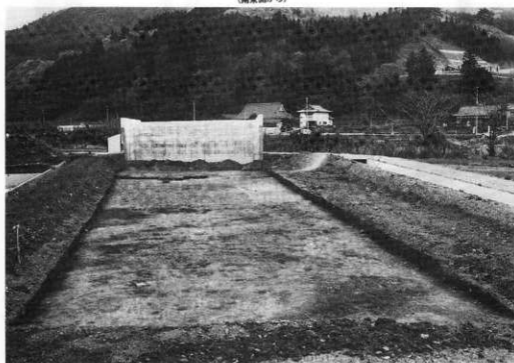


K06～07区 (北東側から)

写真図版 3 土層断面

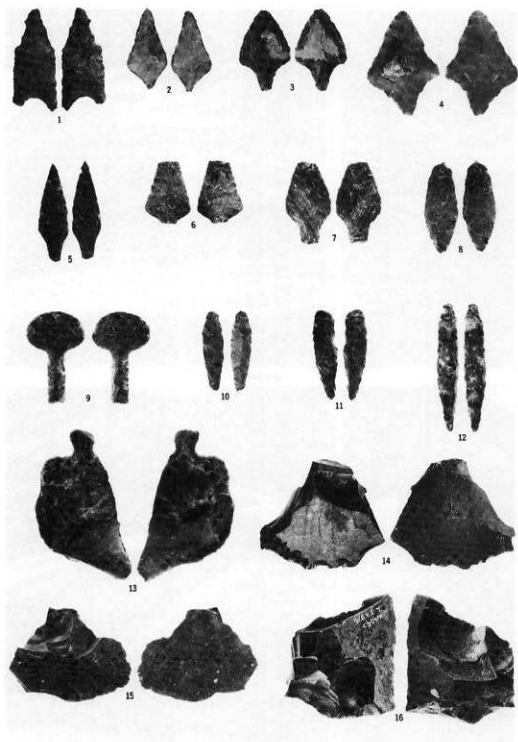


(南東側から)

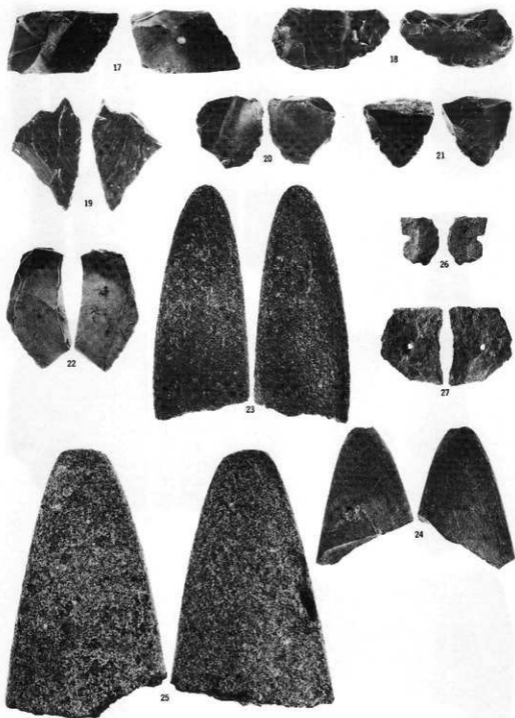


(南東側から)

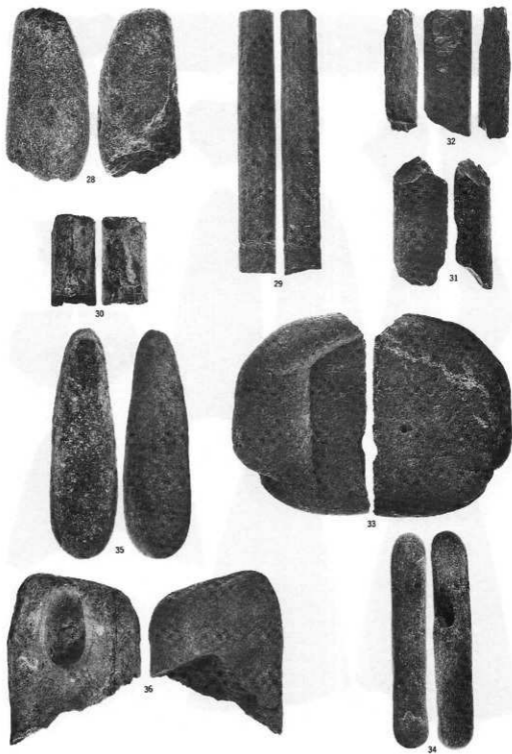
写真図版 4 調査区完掘



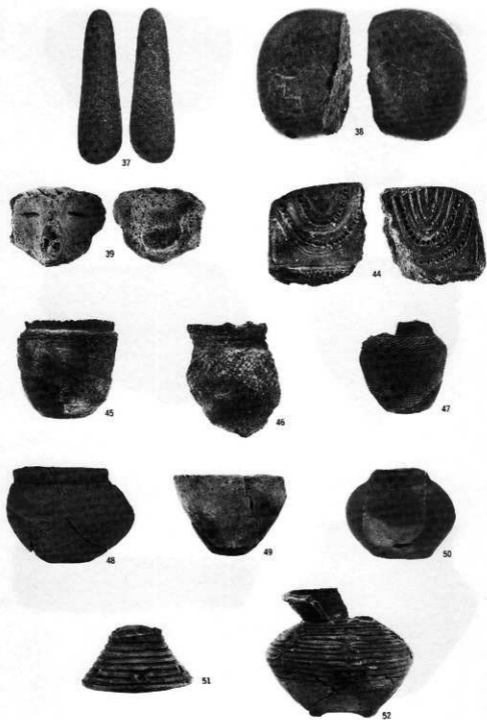
写真図版 5 石器(1)



写真图版 6 石器(2)



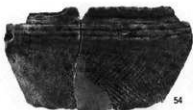
写真図版7 石器(3)



写真図版 8 石器(4)・土器(1)



53



54



55



56



57

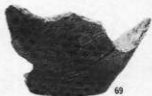


58

写真図版9 土器(2)



写真図版10 土器(3)



写真図版11 土器(4)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事	兼所長	小笠原喜一	高明				
副理	所長	高橋敬明	明一				
[管理課]							
管理課長(兼)	課長補佐	高橋敬明	明一	嘱	託	吉根	田橋
課長	補佐	森藤	陽理	// 技能	士員	佐	藤
主	事	佐藤	理	兼 転技			
[調査課]				文	化	木	信
調査課長	課長補佐	村上昭	直	門 化	員	原	真
課長	補佐	木々嘉	治	// 調		上	
	任文	野哲	憲	// 査		井	宗
主	門調	浦謙	一	// 査		本	建
専	査財	藤利	幸	// 査		坂	克
		與右	門	// 査		花	政
		井川	進	// 査		佐々	昭
		村重	紀	// 査		田	精
		橋敏	男	// 査	付	部	勝
		藤義	介	// 査	員	藤	邦
		瀬	實	// 査		阿	雅
		葉	隆	// 査		安	之
		藤	雄	// 査		星	学
		林	司	// 査		引	己
		木	幹	// 査		鈴	隆
		村	弘	// 査		藤	悟
		木	均	// 査		千	由
		東	行	// 査		熊	一郎
		藤	格	// 査		新	博
		藤	修	// 査		山	博
		敏	雄	// 査		川	英
			明	// 査		八	聡
						重	の
						座	り
[資料課]							
資料課長	課長補佐	村松	夫				
課長	補佐	田鎮	寿				
主	任文						
専	門調						

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第173集

川向遺跡発掘調査報告書

国道107号世田米バイパス関連遺跡発掘調査

印刷 平成4年3月25日

発行 平成4年3月30日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡11-185

TEL(0196) 38-9001~2

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目10-5

TEL(0196) 41-0585
